

平成29年度佐賀県小・中学校学習状況調査[12月実施]結果を受けた取り組みについて

- 1 調査実施日 平成29年12月5日～6日
- 2 調査方式 悉皆調査方式（全数調査）
- 3 調査の対象学年

1年	国語、数学、理科、社会、英語
2年	国語、数学、理科、社会、英語

4 教科に関する調査結果

本校の状況については、次の表のように、10区分の教科において2年の理科が「要努力」の結果でした。2年理科以外は「おおむね達成」基準に到達しており、特に、2年の数学と社会は県の平均正答率を上回っていました。「十分達成」基準に到達した教科はありませんでした。

	国語	数学	理科	社会	英語
1年	○62.0 (62.8)	○54.4 (55.1)	○54.2 (55.0)	○53.8 (56.0)	○61.3 (65.2)
2年	○61.3 (64.1)	○51.5 (50.0)	▼44.7 (49.0)	○52.1 (50.6)	○52.3 (53.4)

※ 上段は本校の平均正答率、下段()は県平均。

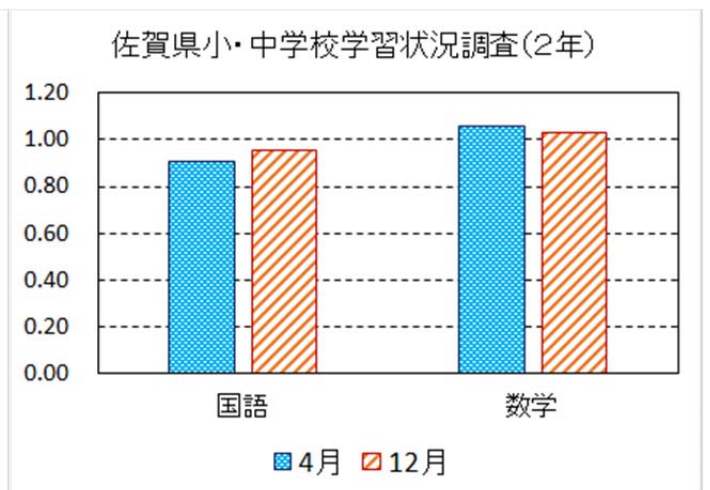
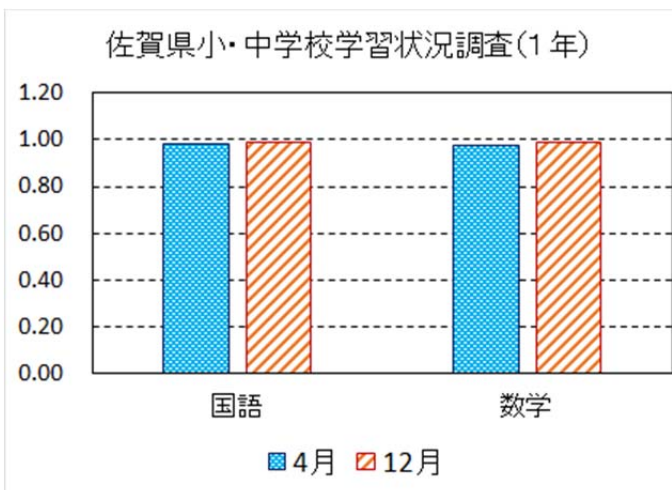
※ ◎印は「十分達成」基準に到達、○印は「おおむね達成」基準に到達、▼印は「要努力」。

※ 正答率単位は%。

国語と数学は、平成29年4月18日実施の対象教科でしたので、この2教科について推移を見ると、県平均を1.00とした比で下のようになりました。

1年国語及び数学、2年国語は県平均に達していませんが、差が縮まりました。対県比で+0.01～+0.05で微増ながら4月実施より向上し、改善しています。2年数学は、対県比は-0.03でマイナスでしたが、県平均を上回っており、良好な状況にあります。

	国語			数学		
	4月実施	12月実施	4月実施からの増加分	4月実施	12月実施	4月実施からの増加分
1年	0.98	0.99	+0.01	0.97	0.99	+0.02
2年	0.91	0.96	+0.05	1.06	1.03	-0.03



また、2年生の理科及び社会、英語は、1年時の平成28年12月に実施された結果と経年比較しました。国語や数学と同じように、県平均との比（対県比）を表すと、次の表やグラフのように、理科は変わりませんでした。県平均を上回る社会はその差が大きくなり良好な状況です。また、英語は、県平均との差が縮まり改善しています。

	理科			社会		
	H28.12 実施 [1年時]	12月実施	1年時からの 増加分	H28.12 実施 [1年時]	12月実施	1年時からの 増加分
2年	0.91	0.91	0.00	1.01	1.03	+0.02

	英語		
	H28.12 実施 [1年時]	12月実施	1年時からの 増加分
2年	0.89	0.98	+0.09

ただし、本調査は、いわゆる100点満点のテストではなく、問題の難易度に関わらず、正答した問題数の割合を示しており、この平均正答率だけでは詳細は分からず、教科ごと設問ごとの分析によって強みや弱みが明らかになります。また、本調査により測定できるのは、学力のうちのあくまで一部であり、すべてではありません。

各教科の観点別及び抜粋した設問ごと正答率による分析の一部は、次の通りです。

(1) 国語 (2年)

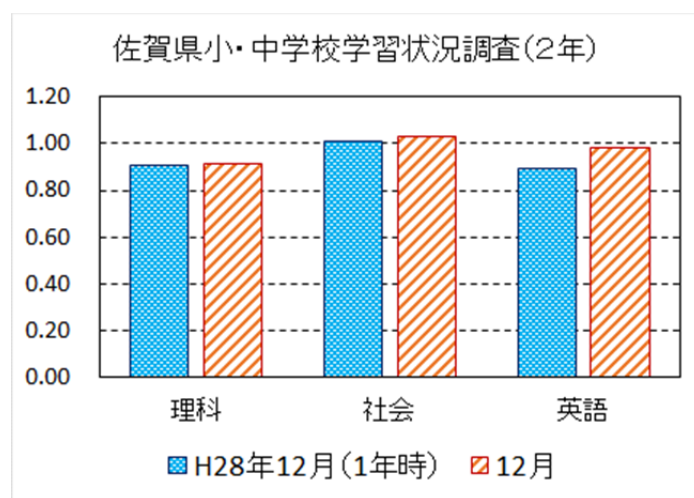
設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	1五	2一	4四
平均正答率	3.5 (42.2)	64.1 (75.3)	31.8 (42.3)
無解答率	10.6 (8.6)	5.9 (5.4)	29.4 (22.9)
観点	話す・聞く	書く	読む
出題の趣旨	話の材料を多様な方法で集め、整理する。	具体例を加えて書く。	情報と関連付けながら読む。

全32設問の平均正答率では、61.3%で、到達基準のおおむね達成基準50.3%を上回っているものの、県平均の64.1%より下回りました。設問別でみると、1五や2一、4四など記述式の問題形式に課題が見られました。

1五是、「話す・聞く能力」観点の問題で、県平均を大きく下回りました。問題内容は、生徒会長選挙の応援演説の原稿を書くとき、条件に合わせて完成させる問題でした。条件は、二分で書くこと、一文目に演説原稿の中からあいさつの効果の一つ書くこと、その根拠となる点を取り上げて書くことでした。一文目が「本田さんは、〇〇〇と言っています」となっていない



い誤答が目立ちました。『条件』に合わせて書く」という学習活動を繰り返し設定し、継続的に指導していきます。

②一、④四も県平均を下回りました。②一は基本問題で、本文中の表から具体例を抜き出して書く記述式問題でした。前後の文の敬体に留意したり、文脈の流れをつかんだりしなければなりません。④四は、情報と関連付けながら読む活用に関する問題でした。無解答率も高く、大きな課題です。正答となるには、三つの条件がありました。「どのようなサイクルかが分かるように書くこと」「なぜそのようなサイクルが必要かが分かるように書くこと」「二文以内で書くこと」でした。誤答の多くは、二つ目の「なぜサイクルが必要か」が書かれてなく、不十分な記述でした。情報と関連付けながら読む力を育成するために、複数の教材を読み比べたり、教材と図表などを関連付けながら読んだりする活動を授業に位置付けます。

(2) 国語 (1年)

4月実施調査では県平均にやや及ばず、対県比は0.98でした。今回も県平均を0.8ポイント下回りましたが、平均正答率は62.0%で県平均との差が縮まり改善できました。

設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	③一	④一	⑤三
平均正答率	9.8 (16.9)	19.1 (29.6)	39.7 (56.3)
無解答率	9.8 (18.1)	3.1 (7.1)	1.5 (5.0)
観点	読む	読む	知識・理解・技能
出題の趣旨	文脈の中における語句の意味を理解する。	描写から行動の理由を読み取る。	文節について理解する。

③一は、本文中にある「井の中の蛙で終わるつもりはない」とは、具体的には、どのようにすることかを抜き出して解答する短答式の問題でした。県が示した十分達成の到達基準は70%で、県平均も到達していませんが、本校の平均正答率も9.8%で大きく下回りました。無解答は目立ちませんでしたが、誤答の多くは「状態」を答えている間違いが多く見られました。設問で示された意図を正確に捉えた上で、問題文を読み、解答を導く力が必要といえます。④一は、描写から行動の理由を読み取る、「読むこと」領域の記述式の問題でした。正答率は19.1%で県平均を10.5ポイント下回りました。登場人物の行動の理由を示された条件に合わせて書く問題で、理由を全て書くことと、一文で書くことの二つの条件を満たせず、不正解になっていました。特に理由が一つしかないものが多く見受けられ、描写から正確に読み取る力が不足しているといえます。⑤三は、「雨が降ったけど、昼にはやんだよ。」の文について、文節に区切る短答式の問題でした。正答率は39.7%で県平均を16.6ポイント下回りました。文節の区切り方が十分理解できていないことが明らかです。言葉の単位(文節、単語)について再度理解させ、折に触れ定着するようにします。

(3) 数学 (2年)

全33設問の平均正答率では、51.5%で、県平均の50.0%及びおおむね達成基準50%を上回りました。十分達成基準の70%には及びませんでした。観点別の正答率を県平均と比較すると、「見方や考え方」「技能」「知識・理解」のすべての観点で県平均を上回っています。

設問別では次のような課題が見られました。

観点別・問題別平均正答率等 ※ () は県平均

	数学的な見方や考え方		数学的な技能		数量や図形などについての知識・理解	
平均正答率	46.0 (44.6)		57.0 (55.1)		46.6 (45.7)	
無解答率	23.2 (21.4)		10.0 (9.2)		4.1 (4.9)	
問題例	14	41.3 (45.9)	12(1)	16.9 (38.1)	6(4)	51.7 (59.5)
					9(4)	40.1 (52.3)

14は、資料の傾向を的確に捉え、判断の理由を数学的な表現を用いて説明する記述式問題でした。ヒストグラムを正しく読み取り、「25.0cmは最頻値ではないので、25.0cmのスキー靴を最も多く買うことは適切ではない」のように最頻値のことを根拠に解答するところを、グラフの形状や度数の大小のみを記述している誤答が目立ちました。自分の考えを説明したり、資料から分かることを適切に書いたりする学習活動を位置付けます。12(1)は度数分布表から相対度数を求める短答式問題でした。県平均を21.2ポイント下回りました。相対度数の意味が理解できていません。資料の活用において、機械的に相対度数を計算して求めるだけでなく、範囲や平均値、中央値などに関連付けて取り扱い、相対度数で表す必要性などを考えるような指導を工夫します。

6(4)は正四角錐の体積の求め方を考える基本的な選択式問題でした。十分な定着が見られません。また、9(4)も二元一次方程式の解を座標とする点の集合が直線として表されることを考える選択式問題ですが課題です。指導にあたっては、二元一次方程式の解の意味を理解できるようにするために、様々な数を文字に代入し、二元一次方程式を成り立たせる文字の値の組を探す活動を取り入れることが考えられます。ここでは、二元一次方程式 $2x + y = 5$ について、 $x = 1$ 、 $y = 3$ であれば成り立つが、 $x = 1$ 、 $y = 2$ では成り立たないことを、 $2x + y$ の式の値を基に判断できることを確認する場面を設定します。その上で、二元一次方程式の解となる x 、 y の値の組は無数にあることを理解できるようにするために、二元一次方程式 $2x + y = 5$ の x に様々な数を代入して y についての方程式をつくり、解となる x 、 y の値の組を求める活動を丁寧に取り入れていくようにします。

(4) 数学 (1年)

全31設問の平均正答率は54.4%で、県平均の55.1%を0.7ポイント下回りました。平均正答率は到達基準のおおむね達成基準51.1%を上回りましたが、設問別に見ると、14問がおおむね達成基準を下回っていました。県平均を上回った設問は31問中10問に止まっています。観点別の正答率を県平均と比較すると、見方や考え方の観点で県平均を上回りましたが、技能及び知識・理解で下回っています。一方、活用に関する問題において、全5問中3問が県平均を上回っていました。

設問別で次のような課題が見られました。

観点別・問題別平均正答率等 ※ () は県平均

	数学的な見方や考え方		数学的な技能		数量や図形などについての知識・理解	
平均正答率	36.2 (33.3)		55.0 (57.1)		62.5 (62.9)	
無解答率	18.6 (17.6)		7.2 (6.4)		1.5 (1.7)	
問題例	12(2)	36.1 (36.7)	2(3)	49.5 (56.6)	5(1)	30.4 (39.3)
			6(1)	65.5 (73.5)	9(5)	52.6 (60.2)

12(2)は、グラフや式などを基に、問題解決の方法を数学的に説明する記述式問題でした。難易度も高く、県平均も低い結果でしたが、本校無解答率も 21.6% (県無解答率 18.6%) と高く課題となりました。設問内容は、2人が歩いている様子を表したグラフから、10分後に2人が何m離れているかを調べる方法を説明するものでした。グラフや式などを基にして数学的に記述する必要があります。正答例は、2人が出発してから x 分後の家からの道のりを y mとして、 x と y の関係を表したグラフから式をそれぞれ求めて10分間で歩いた距離を比較する方法または比例の関係を利用して、グラフから1分後の2人間の距離を求めて10倍する方法がありました。いずれにしても、グラフからそのときの様子を把握し、読み取れる多くのことを活用して解決しなければなりません。2年時の一次関数の単元に関係するところでもあり、小6で学習した「いろいろな変わり方のグラフ」を振り返ったり、考え方を記述したりする学習を計画的に位置付けていきます。

2(3)は、 $4(x-2)-3(2x+1)$ を簡単にする計算問題でした。分配法則を用いた文字式の計算をすることが定着していません。十分達成基準の70%に到達するように家庭学習も充実させ徹底していきます。6(1)は、正三角形のタイルを規則的に並べて模様を作っていく、5番目の模様を作るときの正三角形のタイルの枚数を求める問題で、与えられた問題場面における考察の対象を明確に捉える短答式問題でした。規則的に増えていく正三角形のタイルの枚数に着目することにより、問題を解決することができる基本問題ですが、県平均を8.0ポイント下回りました。このような課題学習は、数学的な見方や考え方とも関連し、深い学びにつながる第一歩だといえます。変化していく規則性を正しく捉えられるように、様々な題材を工夫し、適切に位置付けていきます。5(1)は、一元一次方程式の解の意味を考える選択式問題でした。一次方程式 $3x-2=6+x$ の左辺と右辺それぞれの x に4を代入し、計算した結果が10になることから、一次方程式の解が4であるか10であるかを判断するものでした。到達基準が75であり、基本問題にもかかわらず、平均正答率は30.4%で大きく下回りました。誤答の多くは、「ア この方程式の解は10である」を選択していました。機械的に方程式の解を求めるだけでなく、解の意味や代入することの意味を正しく理解するように再度確認していきます。9(5)は、比例 $y=-1/3x$ のグラフを選ぶ選択式問題でした。比例定数が負の数であることから、右下がりのグラフであると判断でき、絶対値が1/3であることから1つに絞ることができます。2年時の一次関数のグラフとも関連があり、定着を図ります。

(5) 理科 (2年)

全29設問の平均正答率は、44.7%で、県平均の49.0%より下回り、観点別においても県平均を下回りました。県が示す到達基準のおおむね達成では「観察・実験の技能」が基準値を上回ることはできましたが、「科学的な思考・表現」、「自然現象についての知識・理解」はおお

むね達成の基準値を上回ることができませんでした。

観点別平均正答率及び無解答率 ※ () は県平均

	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての知識・理解
平均正答率	34.1 (37.8)	54.8 (57.6)	48.8 (54.7)
無解答率	11.6 (7.2)	6.3 (3.4)	13.3 (8.8)

特に、「自然現象についての知識理解」の観点の問題の5(1)や10(1)、11(2)、また、「科学的な思考・表現」の9(2)は県平均を大きく下回りました。設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	5(1)	10(1)	11(2)	9(2)
平均正答率	9.9 (37.4)	32.6 (47.5)	32.0 (45.8)	11.6 (25.6)
無解答率	29.7 (15.8)	14.5 (11.8)	25.6 (15.0)	12.2 (8.3)
観点	自然事象についての知識・理解	自然事象についての知識・理解	自然事象についての知識・理解	科学的な思考・表現
出題の趣旨	主要動を理解している。	組織を理解している。	消化酵素を理解している。	魚を焼く場面において、化学変化の知識を活用して、焼けた魚の表面の様子について説明することができる。

「自然現象についての知識・理解」の観点の問題の5(1)では、県平均を27.5ポイント下回りました。小さなゆれのあとに大きなゆれが記録されている地震計の記録が示され、この大きなゆれを何というかを解答する短答式問題でした。正答は「主要動」で、定着していません。また、10(1)も器官について説明した出題で、「器官はいくつかの()が集まってできている。()は、形やはたらきが同じ細胞が集まったものである」の()に当てはまる語句「組織」を解答する短答式問題でした。さらに、11(2)は食物を分解するはたらきをもつ物質「消化酵素」を解答する短答式問題で、これも定着していませんでした。いずれも、自然の事物・現象についての基礎的な知識が身に付いていないといえます。概念や原理・法則について説明する活動を通して、知識同士のつながりを意識しながら理解できるように工夫して取り組みます。

「科学的な思考・表現」観点の9(2)では、県平均を14.0ポイント下回りました。問題内容は、魚を焼くときに、ガスコンロのガスを使って焼いたときと、木炭を使って焼いたときで魚の表面に違いがあった理由を科学的に考察する活用に関する問題でした。文中に、

木炭はほとんどが炭素でできていて、そのため化学式はCで表される。
ガスコンロのガスはプロパンガスで、化学式はC₃H₈で表される。

とあり、ここで、化学式からガスコンロのガスには水素原子があることに注目する必要がありました。今後は、日常生活や社会の特定の場面において、身に付けた知識・技能を活用することを目指し、授業で学習した内容を使って日常生活に見られる事象を説明させる機会を効果的に設けていくようにします。

(6) 理科 (1年)

全 31 設問の平均正答率は 54.2% で、おおむね達成基準の 50.2% は上回ったものの、県平均を 0.8 ポイント下回りました。また、観点別では、「観察・実験の技能」、「自然現象についての知識・理解」がおおむね達成基準を上回りました。

観点別平均正答率及び無解答率 ※ () は県平均

	科学的な思考・表現	観察・実験の技能	自然事象についての知識・理解
平均正答率	39.2 (39.8)	65.7 (63.6)	60.2 (63.2)
無解答率	2.9 (3.1)	2.0 (1.9)	4.1 (4.5)

設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	1(2)	3(2)	5	14(2)
平均正答率	25.9 (28.7)	37.3 (41.6)	25.4 (32.2)	25.4 (27.4)
無解答率	0.5 (0.3)	0.5 (0.3)	0.5 (0.4)	10.9 (9.5)
観点	観察・実験の技能	科学的な思考・表現	科学的な思考・表現	自然事象についての知識・理解
出題の趣旨	顕微鏡を正しい手順で使うことができる。	光合成の実験から、二酸化炭素の有無について推定することができる。	植物の養分の移動についての知識を活用し、キウイフルーツの実が大きくなる理由を説明することができる。	質量パーセント濃度について理解している。

「観察・実験の技能」観点は全 8 問で県平均を 2.1 ポイント上回りましたが、1(2)は県平均を 2.8 ポイント下回りました。顕微鏡の使い方、正しい操作の順に並び変える問題でした。顕微鏡の使い方の順序には、カバーガラスを割らないようにするなど根拠があります。一つ一つの操作が確かな理解につながるように丁寧に扱うようにします。「科学的な思考・表現」観点の3(2)は 4 本の試験官を使って光合成の対照実験を行い、石灰水の色の変化を推定する選択式問題でした。十分定着できていないことから、実験結果を基に推定する力を付けなければなりません。自分の設定した仮説や計画した観察、実験の方法が正しければ、どのような結果が得られるか見通しをもたせた上で観察、実験を行うようにし、さらに、得られた結果を基に考察する時間を十分にとるようにします。5の問題も同じ観点で県平均を 6.8 ポイント下回りました。キウイフルーツの実を大きくするために、木の幹のまわりを切り取る場面で、その理由を説明したものを選ぶ問題でした。維管束の知識だけではなく、科学的な思考が求められました。日常生活や社会の特定の場面において、身に付けた知識・技能を活用できるように、授

業で学習した内容を使って日常生活に見られる事象を説明させる機会を設けます。

「自然事象についての知識・理解」観点の **14**(2)は十分達成基準の70%を大きく下回り、県平均も2.0ポイント下回りました。質量パーセント濃度を求める基本問題です。100gの水に、ミョウバンを60g溶かした水溶液ですので、 $60 \div 160$ を計算すればよいのですが、質量パーセント濃度の概念が理解できていないと考えられます。短絡的に、溶質の質量/溶液の質量 $\times 100$ の公式を押さえるのではなく、意味を考えたり、食塩水など具体的な溶液で説明したりして、水溶液全体に対する溶質の質量の割合と関連付けて理解できるようにします。

(7) 社会 (2年)

全30設問の平均正答率は52.1%で、県平均の50.6%を上回りましたが、県が示す到達基準の十分達成基準68.0%には及びませんでした。観点別においてもすべて県平均を上回りました。

観点別平均正答率及び無解答率 ※ () は県平均

	社会的な思考・判断・表現	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解
平均正答率	37.3 (33.6)	64.1 (61.9)	52.2 (49.0)
無解答率	23.8 (16.2)	3.3 (2.1)	15.9 (12.5)

記述式問題が4問ありましたが、平均正答率は4問とも県平均を上回りました。一般的に、説明する設問については苦手意識が高いと言われていますが、日頃から問題意識をもち、自分の意見を書く場を設定していた成果が見られました。**3**(4)は、資料を基に、本州四国連絡橋や高速道路が自然災害時に迂回路として機能したことを説明する記述式問題でした。本校正答率は43.6%で県平均を10.0ポイント上回りました。今後も資料から読み取った情報を基に、社会的事象の特色や事象間を関連付けて説明する力や、社会的事象の意味や意義を解釈し理由を説明する力を付けるために、課題を追究したり解決したりする活動の中で、生徒が資料から読み取った情報を基に、理由を考えたり、自分の考えを説明したりするような活動を授業展開に位置付けるようにします。

他に、設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	1 (1)②	2 (1)①	4 (4)
平均正答率	25.6 (37.7)	52.9 (65.3)	22.7 (17.7)
無解答率	40.1 (26.9)	21.5 (11.8)	38.4 (26.1)
観点	社会的事象についての知識・理解	社会的事象についての知識・理解	社会的な思考・判断・表現
出題の趣旨	先端技術産業や情報技術産業の企業が集まる地域であるシリコンバレーを理解している。	環太平洋造山帯を理解している。	資料を基に、応仁の乱後に戦国時代へと変化した理由を説明することができる。

「社会的事象についての知識・理解」の観点で、**1**(1)②と**2**(1)①は、どちらも県平均を下回り、おおむね達成基準も大きく下回りました。無解答率も高い結果でした。**1**(1)②はサン

フランススコの郊外にある世界有数の先端技術産業や情報技術産業の企業が集まる地域名を答える短答式問題でした。「シリコンバレー」が答えられていません。[2](1)①で、資料に示された造山帯の名前も同じく、低い正答率となりました。基礎的・基本的な知識、概念を習得させるために、授業の導入段階で学習のめあてとともに、習得させる知識、概念をキーワードとして提示したり、習得させる知識、概念を明確にしたりします。また、単元や授業の前後に小テストを実施するなどして、重要語句の一问一答形式の反復的な学習を設定するだけでなく、単元や授業のまとめの際に、その語句に関する社会的事象の関係性などを見つけさせ、習得した知識や概念を活用しながら説明させたり、レポートにまとめさせたりするなどの表現活動を位置付けます。

4は、活用に関するこの記述式問題は、おおむね達成基準の35%にも到達せず、22.7%でした。無解答率も38.4%で高く、今後の課題となりました。応仁の乱後の京都の様子や下克上の資料を活用して、戦国時代へと変化した理由を考えなければなりません。人物名や地名を暗記するだけではなく、社会事象の背景を探り、関わりを読み取り説明することが求められています。社会的事象の意味や意義を解釈し理由を説明する課題を解決するために、生徒が資料から読み取った情報を基に、理由を考えたり、自分の考えを説明したりするような学習活動を位置付けながら定着を図っていきます。

(8) 社会 (1年)

全30設問の平均正答率は53.8%で、県平均の56.0%を下回り、3つの観点別においても県平均を下回りました。県が示す到達基準のおおむね達成基準49.3%より上回りました。

観点別平均正答率及び無解答率 ※ () は県平均

	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解	社会的な思考・判断・表現
平均正答率	59.9 (61.5)	56.9 (59.1)	38.7 (41.9)
無解答率	0.8 (0.8)	4.7 (4.8)	16.0 (13.3)

設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	[1](2)	[3](2)①	5
平均正答率	41.7 (39.2)	60.4 (65.9)	37.1 (44.7)
無解答率	0.5 (0.3)	16.1 (14.3)	0.0 (1.8)
観点	資料活用の技能	社会的事象についての知識・理解	社会的な思考・判断・表現
出題の趣旨	資料に示された地点の緯度と経度を読み取ることができる。	ヨーロッパ諸国の人々が現地の人々を労働者として雇っていた大規模な農園がプランテーションであることを理解している。	資料と国司についての知識を基に、律令国家における、当時の日本の支配体制について説明することができる。

①(2)は、「資料活用の技能」の観点で、地図に示された地点の緯度と経度を「北緯」と「西経」を使って表す選択式問題でした。県平均を上回っていますが、十分達成基準70%、おおむね達成基準50%を下回っており、要努力判定の問いでした。基本的な事項ですので、世界地図や地球儀を扱う際には必ず緯度経度を確認しながら繰り返し指導していきます。

「社会的事象についての知識・理解」観点の③(2)①は、ヨーロッパ諸国の人々が、現地の人々を労働者として使い、輸出を目的とした作物が栽培された大規模な農園のことを、「プランテーション」ということを答える短答式問題でした。正答率は60.4%で県平均を5.5ポイント下回りました。これも基本的な問題です。再度振り返り、定着を図ります。⑤(5)は、「社会的な思考・判断・表現」観点でした。大宝律令をもとに政治を行う律令国家のしくみが整った当時、全国はどのように支配されていたかを「中央の二官八省と地方・九州の役所・役人」の資料と「このころの地方の様子」、「律令国家で使用された印」の資料を基に、「国司」という語句を使って答える記述式問題でした。国ごとに役所が置かれ、その役所に中央から任命された役人（貴族）が国司として派遣されていたことを関連付けて記述しなければなりません。生徒が自分の考えを説明する際に、そのように考えた根拠を示したり、そのように考えた理由を述べたりする授業展開を位置付けていきます。

(9) 英語 (2年)

全28設問の平均正答率は52.3%で、県平均の53.4%を下回りました。県が示す到達基準のおおむね達成基準46.8%は上回りました。観点別では、「外国語理解の能力」の観点が県平均を下回りました。

観点別平均正答率及び無解答率 ※ () は県平均

	外国語理解の能力	外国語表現の能力	言語・文化についての知識・理解
平均正答率	53.7 (56.5)	45.6 (45.6)	43.4 (42.8)
無解答率	9.7 (7.6)	17.1 (15.5)	14.0 (13.5)

設問別の正答率を県平均と一部比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※ () は県平均

設問	⑥(1) B	⑧(2)	⑫(2)
平均正答率	7.6 (8.4)	12.2 (19.9)	25.0 (39.8)
無解答率	25.6 (18.9)	27.3 (23.3)	36.0 (24.7)
観点	外国語理解の能力	外国語表現の能力 及び 言語・文化についての知識・理解	外国語表現の能力 及び 言語・文化についての知識・理解
出題の趣旨	対話文を読んで、話し手の伝えようとしていることを正確に読み取る。	疑問文の構造を理解し、語と語のつながりに注意して正しく書く。	書かれた内容を踏まえたコメントと質問を書く。

⑥(1) Bは、対話文を読んで、話し手の意図や伝えようとしていることを正確に読み取ることが必要でした。無解答率も高く、正答率が一番低い設問で、文脈の流れから文中の空欄に当てはまる単語1語を対話文の中から抜き出す短答式問題でした。1冊の本を見せながら、渡り

鳥について話している場面でしたが、まず、その内容を理解しなければなりません。月名や季節、温度（寒いなど）の単語が多く使われていましたが、これらは、日頃の授業の中でよく使っている単語にもかかわらず、定着していませんでした。今後は、英作文の時間を充実させ、単語を復習するワークシートを工夫し、活用していくようにします。[8](2)は対話が成り立つように、〔 〕内に示された語を用いて指示された語数の英文を答える記述式問題でした。She lives in Kumamoto. が回答となるように疑問文を考えるもので、〔she と live を含む 4 語〕が条件でした。Where does she live? の正答に対して、疑問詞 where を正しく書けていないものや、疑問詞のない Does～? の疑問文で答えているものが多く目立ちました。今後は、日頃から帯活動のペア活動で疑問詞を使った対話を練習し、疑問詞のある疑問文とその答え方が定着していくようにします。[12](2)は、スミス先生が書いたレポートについて、伝えたいコメントを条件にしたがって 3 文以上で答える活用に関する記述式問題でした。無解答率が 36.0% だったことから、文章を読むことができでいない、何を書けばよいか分からないという状況が見られます。教科書の内容を理解するだけでなく、その内容に対してコメントを英語で書く活動を適切に位置付けながら、コメントを考え、英語で書く力を付けていくようにします。

(10) 英語（1年）

全 26 設問の平均正答率は 61.3% で、県平均の 65.2% を下回りました。

次のように、観点別においては、すべての観点で県平均を下回りました。「外国語理解の能力」観点はおおむね達成基準 49.7% を大きく上回りました。

観点別平均正答率及び無解答率 ※（ ）は県平均

	外国語表現の能力	外国語理解の能力	言語・文化についての知識・理解
平均正答率	48.6 (53.1)	65.9 (69.1)	54.1 (58.4)
無解答率	11.7 (9.9)	4.0 (3.6)	8.3 (7.0)

「外国語表現の能力」の観点の設問は 8 問あり、その中で課題とみられる設問を県平均と比較すると、次のような結果でした。

設問別平均正答率等 ※（ ）は県平均

設問	[9](1)	[9](2)	[10](2)
平均正答率	44.0 (43.5)	32.6 (40.9)	23.3 (38.5)
無解答率	7.3 (6.3)	14.0 (10.9)	26.4 (17.1)
観点	外国語表現の能力	外国語表現の能力	外国語表現の能力
出題の趣旨	対話文を読んで内容を理解し、適切な語を書く。	対話文を読んで内容を理解し、適切な語を書く。	疑問文の構造を理解し、状況に合った文を正しく書く。

[9](1)は、対話文を完成させる短答式問題でした。問題は、

A: Does your brother play soccer?

B: No, he doesn't play soccer. But he [] baseball.

A: Oh, I play baseball, too.

です。

正答は plays で、県平均を 0.5 ポイント上回りましたがおおむね達成基準の 55%を下回る結果となりました。文脈から、Bが野球をするという内容になることを理解した上で、3 人称単数現在であることに留意する必要がありました。3 単現の s が用いられた英文に口頭で言えるだけでなく、正確に書けることが必要です。英単語を書くことを家庭学習の課題としてだけではなく、授業中にも英文や英単語を書く時間を意識的に設け、充実した書く活動を仕組みます。

9(2)も同様です。

A: I' m hungry.

B: Really? What [] do you have breakfast every morning?

A: I have breakfast at six.

で、日常生活における活動項目の時刻を問う What time~?の短答式問題でした。Aの最後に at six があることが [] に入る英単語を考えるポイントになりますが、breakfast を問う疑問文だと考え、What food で始まる誤答が目立ちました。授業の導入で問いかける会話のバリエーションを増やすと同時に、話すことと書くことをセットで学習するなど工夫していきます。

10(2)は、対話文を完成させる短答式問題でした。問題は、

① [] ?

② Your bag? Oh, it' s on the desk.

③ Thank you.

④ You' re welcome.

という会話が、その内容を説明するイラストで出題されました。Where is ~?という英文を使った英問英答はこれまで十分に指導していましたが、Where is your pen? に対して、It' s on the desk. と答えるような決まったパターンだけを理解していたと考えられます。疑問文の構造を理解し、語と語のつながりに注意して、状況に合った文を正しく書くことが求められます。教科書の基本文や本文を扱う際に、状況を推測させるような発問をしたり、実際のコミュニケーション場面を想定した言語活動を設定したり、生徒が試行錯誤しながら、発話を考えることができるような機会を設けていくようにします。